

小学校六年の部 佳作 —— 対象作品／フランチェスコ・ダダモ作『イクバルの闘い〜世界一勇気のある少年〜』鈴木出版

イクバルがくれた「勇気」

弘前市立大成小学校 高山京慧

「ぼくは学校が嫌いですー」

理由はいくつかあるけれど、学校に行きたくなくて、休んだこともあります。でも、ぼくには学校に通う「権利」があります。おこられるけど、お母さんに口答えをする「自由」もあります。

この物語の主人公イクバルは、学校に通えず、十分な食事もらえず、夜明けから日暮れまで働かされている子どもたちを救った勇気ある少年です。イクバルの国パキスタンでは、親の借金が原因で働かなければならない子どもたちが、約七〇〇万人もいるそうです。子どもたちの一日の給料は、たったの「ルピー」！日本円だと一円未満です。しかし、働いても働いても、借金がなくなることはありません。でも、誰も文句を言いません。おかしいとも思いません。なぜなら、それが「あたり前」だからー

「え！どうして!?なぜ逃げないの?なぜみんな、おかしいと思わないの?」

ぼくは最初、不思議でたまりませんでした。でも、本を読み進めていくと、その理由はすぐに分かりました。学校に通えないから字が読めず、本を読めず、知識を得ることができないからです。そして、子どもたちの親も学校に通ったことがないから、なにが正しくてなにが間違っているか、知らないのです。

ぼくは学校に通っているから、字が読めます。本を読めます。正しいことと、そうではないことの区別がわかります。でも、もしパキスタンに生まれていたら…イクバルと同じように、うす暗いじゅうたん工場で、夜明けから日暮れまで働いていたかもしれせん。なんの希望も、なんの疑問も抱かずにー。

ぼくは今まで、学校に通えることはあたり前だと思っていたけれど、勉強ができること、お腹いっぱい給食を食べられること、友達と遊ぶこと、どれも日本という国に生まれたからこそ、できていたんだと気が付きました。「学校なんて嫌

いだ」と平気で口にしていた自分を、とてもはずかしく思いました。学校を好きになれるように、なんの努力もしないで甘えていた自分がいたことを知りました。

イクバルのように、ほんの少しの勇気をもって行動しよう。ルールを守らない友達がいたら、見て見ぬふりをしないで注

意しよう。不満ばかりを口にするんじゃないで、まずは自分から行動しよう。努力をしよう。そうすれば、きっと少しずつ学校が好きになれるはずだから。

「ほくは、もう迷わない。なにも怖くない。」